

# 歴史に学び 地方の未来を読む

歴史家・作家 加来 耕三

## 歴史を実生活に活かすには 「答え」だけ知っていても意味がない

私が伝えたいことはたった一つ、「どうすれば歴史を具体的に仕事や日常生活に活用できるか」です。歴史の事象を見ていくと、AがBになる、BがCになる。その流れは自然ですから、結果だけを追いかけていくと何一つ疑問が出てきません。

なぜ物事がそうなったのか、という理由やきっかけが分からないまま、結果だけを知っていても歴史を活用することはできません。

つまり、答えだけを知っていても意味がないのです。そのことを、ここでは証明してみたいと思います。

## マイナスに見える事象の中にプラスの 未来を導き出せるのが、歴史学の強み

数年前から人工知能AIが台頭し、我々の生活が少しずつ変わってきました。いわゆるパラダイムシフト（劇的な変化）やシンギュラリティ（技術的な特異点）に我々は遭遇しているのです。

AIが拡大すると、人間の仕事をAIが代替するようになり、人間は仕事を失うのではないかとわれています。特に、ホワイトカラーが全滅するのではないかと。しかし、歴史学はこの見立てに対して、逆の答えを用意できます。物事にはプラスの面とマイナスの面があり、プラスの未来を導き出せるのが歴史学なのです。

1872（明治5）年に新橋から横浜まで蒸気機関車が開通しましたが、鉄道が通ったことで、それまで輸送に携わっていた駕籠かきや馬糞ぎ（馬子）たちは、一斉に仕事を失いました。

このマイナスの結果だけを見ると、AIによってホワイトカラーが全滅するという未来しか見えなわけですが、実際に歴史がどうだったかという、プラスの面が見えてきます。

たとえば北前船の船主たちは、鉄道会社の株を買って財を成しました。海上を船で運搬するより、陸上を鉄道で運搬したほうが、早く・大量に・遠くへ人や物を運べますし、事故が起きても陸のほうが荷の回収がやりやすい。これからは鉄道の時代だと考えて、積極的な投資をしたわけです。

その結果、鉄道業界が発展し、鉄道網が短期間で全国に広がりました。駅の周りには街ができ、紡績会社などの産業が生まれて、そこで働く人たちのための食堂、住宅などが建設されていきました。

鉄道ができたことが、結果的にマイナスだったのかというと、日本の経済成長の面では大きなプラスだったといえます。

同じように、AIが台頭した未来を想像してみると、日本は少子化で人口が減少していきますが、AIが人間の賃金分を生み出すとすれば、新しく創造されたAI導入の職場では、GDPが増える計算になります。すると週休3日制、4日制が当たり前になり、余暇のための趣味の世界が活性化するでしょう。そこに新たなビジネスチャンスが生まれます。

## 加来 耕三 (かく こうぞう) .....

### 略歴

歴史家・作家として著作活動を行っている。内外情勢調査会講師。中小企業大学校講師。政経懇話会講師。目下、「偉人・素顔の履歴書」(BS11・土曜夜8時)、「関口宏の一番新しい中世史」(BS-TBS・土曜昼12時)に出演中。



ホワイトカラーが要らなくなる代わりに、余暇の世界に新たな人材が求められる時代となったとき、地方や地域においてどういう影響が起こるのかを考えてほしいのです。

我々は、パラダイムシフトのさなかにおいて、新しい価値観が生まれるということを前提にした、ものの考え方を持たねばなりません。

## 間もなく市町村に対する、市民の暴動が起こる予兆がある

近未来の話をするうえで見逃せない問題があります。平成の30年間で我々の給料は全く上がりませんでした。財務省が発表した国民負担率は、2011年が38.9%、2021年が48.0%となっています。

江戸時代はボーダーラインが五公五民で、これを超えると一揆が起こっています。今の日本はもう五公五民のラインにきていますが、政府はさらに税率を上げようとしています。

つまり、想像力をもって考えれば、地方で一揆のような市民による反乱が起こり、市町村に対して襲い掛かってくる、その沸点がそこまできていることが分かってきます。

日本人は、自分の尻に火がつかないと動きません。パラダイムシフトは唐突に起こるように見えても、実はいくつも前兆があり、予測できるものです。そのことを歴史は教えてくれます。

## 明治維新はいつ、どうして始まったのか 教科書では習わない歴史こそ大事

では、具体的にどのように歴史に学べばいいかを考えていきます。そのために本日は、明治維新の話をしていきましょう。

明治維新は1868(慶応4)年9月の改元で成就した、と学校で習ってきました。では、明治維新はいつ始まったのでしょうか。この問いに正しく答えられる人は、まずいません。スタート地点(時点)が分からないということは、プロセスが理解できていない、つまり知っているのは「答え」だけということです。

少し歴史に詳しい人は、ペリー来航の1853(嘉永6)年6月と答えるかもしれません。この答えが正しいとして、では日本人はペリーの何に驚いて、明治維新に突入していったのでしょうか。

ペリーの船が黒かったからでも、大きかったからでもありません。ペリーが浦賀に来る7年前にビッドルというアメリカの東インド艦隊の司令官が黒船で来日していますが、そのとき日本人はまったく驚きもしませんでした。

実は、ペリーが来たこと自体は何ということではなかったのです。ペリーが「来年また来ます」と言って錨(いかり)を上げるまで冷静でした。ところが、艦隊が帰り際、測量しながら品川沖のある地点まで到達したのを知った途端、日本の有識者たちが動転し、パニックを起こしたのです。ペリーの艦隊

がペクサン砲という最新鋭の爆裂弾を搭載していることを、彼らは知っていたからです。

当時の日本には旧式の大砲しかありませんでした。熱せられた鉄の球を飛ばすだけで、その飛距離も400mほど。球が落ちて押しつぶされ、火事になることはあっても、爆発して被害が大きくなることはなかったのです。それに対して、ペクサン砲は3～3.5kmの飛距離があり、ペリーの艦隊が到達した品川沖のある地点から発砲すれば、江戸城の本丸に届いてしまいます。それを理解したことで、日本はパニックに陥ったのでした。

ペリーの怖さ、日本の危うさを目の当たりにして「明治維新を急がねばならない」という現実を痛感し、日本人は15年という短期間で、一気に物事を進めたというわけです。

## アヘン戦争で兵力88万人の清国が2万人のイギリスに大敗した理由

ペリー来航の13年前、1840（天保11）年こそ本当の意味での、明治維新のスタートだと最近は学校で教えています。その年はアヘン戦争が起こった年です。

アヘン戦争は中国（清）とイギリスの戦争ですので、なぜ外国の戦争が明治維新のスタートなのかと思うかもしれません。その理由を説明します。

当時の清国の兵力は陸軍だけで88万人、対するイギリスは延べ兵士わずか2万人。単純に考えて、44対1もの差があれば、清国が勝つのが当たり前ですが、結果はイギリスの勝利でした。

戦争のそもそもの原因は、持ち込まれたアヘンの処分を間違ったことです。イギリスからのアヘンによって、国内にアヘン中毒が広まることを恐れた清国は、その没収したアヘンを隣の州・省との境に捨て、隣の州・省もまた同じことを繰り返し、結局、国内にアヘンを蔓延させてしまいました。

清国には「国」という概念がなかったのです。

州や省を一国と捉えていたので、隣の州・省に

捨てるという処分法になってしまいました。

また、州・省の単位で物事を考えていたために、清国全体でイギリス軍と戦うという発想になりませんでした。上海で戦っていても、隣の州・省は手出しをしていません。イギリス軍は清国と戦っていたのではなく、それぞれの州・省と戦ったことで各個撃破ができたのでした。

## 明治維新の真の功労者は西郷隆盛ではなく、清国の敗因に学んだ島津斉彬

国という概念を持っていなかったのは、幕末までの日本も同じです。当時の人々は江戸、薩摩、会津などの「幕・藩＝国」という捉え方でした。

さて、清国の指揮官であった林則徐という人物が、なぜ自国が負けたのか分からず、魏源という歴史家に敗因を調べるよう託しました。魏源は長いレポートを書き残しているのですが、これを読んで分析したのが、若き日の薩摩藩主・島津斉彬です。彼は「国民というものをつくって、国民一人ひとりが国を守るといふ、新しい政治の仕組みをつくらなければ、日本は欧米列強の植民地になるしかない」と論じました。また、「敵の艦隊を迎え撃つだけでなく、こちらから艦隊を揃えて、押していくぐらいの気概を持たない限り、この時代は生き残れない」とも言っています。

斉彬が新しい国家をつくるために描いた青写真を受け継ぎ、明治維新を最短距離で達成したのが、愛弟子の西郷隆盛です。西郷に正義はなく、ただ師匠の「急がないとこの国が危ない」という言葉を信じて、まっすぐ走った結果、1868（慶応4）年に明治維新が成就したわけで、つまりアヘン戦争が明治維新の起点だといえるのです。

多く人は、明治維新のスタートについて考えることがありません。しかし、1868年に明治維新達成という答えだけを知っていることに、何の意味があるでしょう。

地方の将来を考えるのであれば、なぜそうなったのかというスタートのところを押さえないで、結

果だけを見て、どうしよう、こうしようと考えても答えはでてきません。歴史はそのことを雄弁に繰り返し語っているのですが、なかなかそこを認めてもらえないのが現状です。

## 国政、地方行政にも変革のときがきている

薩長同盟から<sup>ぼしん</sup>戊辰戦争への過程を、「けしからん、そのせいで維新の方向性を誤らせ、日本は軍国主義になって、戦争で亡国になりかけた」と批判する人がいます。歴史の世界で一番やってはいけないことは、すべてが終わったそのあとで、「ああすればよかった」、「こうすればよかった」と言うことです。もし薩長同盟から戊辰戦争への過程がなければ、日本は日清戦争を迎える前に、国を失っていたかもしれないのです。

同じ問題が今、我々にも突き付けられています。地方行政のみならず国政においてもです。日本人のほとんどが衆議院、参議院の二つは要らないと思っています。恐らく、いずれは一つになるでしょうが、すでにそうすべき状況にきているにもかかわらず、この国は何も変わりません。

日本人は、何事を勉強するのも中途半端のきらいがあります。「何となく知っている」というのと「何も知らない」というのは大きく違います。何となく、という無知は非常に罪深いことですが、何も知らない人は一から勉強します。何となく知っていると思いついでいる人は、改めて調べようとしません。同じような現象が歴史学だけでなく、あらゆる分野で起こっていますが、そのことを考えようとしなのが、日本という国のようです。同じ<sup>まてつ</sup>蹉跌を同じように踏みながら、同じ失敗を繰り返し繰り返しやって懲りない。熱しやすく冷めやすい、そういう民族性なのかもしれません。

## 歴史が証明する「アップダウン40年説」 次の底は2025年か

では、日本の国がこれからどうなっていくか、心

配している方のために、歴史学における一つの考え方を紹介します。

近現代史では「アップダウン40年説」というのが言われてきました。明治維新が成就したといわれる年の3年前=1865（慶応元）年に、朝廷が開国を認め、日本は積極的な海外交渉を始めます。ここを起点に考えて、40年後というとは1905（明治38）年です。日露戦争に勝利したこの年が、日本が最高に輝いていた年だったといえるでしょう。

ところが、ロシアに勝ったことで有頂天になった日本は、「我々も強国の仲間入りをした。一流国なんだ」と思い上がり、植民地政策に舵を切りまします。そして、40年後の1945（昭和20）年に太平洋戦争に負け、全部を失ってしまいました。

さあ、もう一回やるぞ、と頑張れたのは、大正や昭和一桁生まれの人々の、祖国復興への強い想いがあったからに他なりません。

40年後の1985（昭和60）年には、プラザ合意（日・米・英・独・仏の先進5カ国による為替レート安定化に関する合意）を達成しました。

再びアップ期の頂点に来た日本は、またしても調子に乗って、バブル期に突入していくのです。そこからバブル崩壊、平成の墜落期を迎えたことはいふまでもありません。

この法則でいくと、次の底は2025年になります。2025年に底を迎えた後、再浮上があるかといえば、もう浮上することはないのではないかと私は考えています。高齢者ばかりで若い人は増えず、新しい産業も見当たりません。観光で生き残るしかありませんが、歴史的に見ると、観光立国に<sup>ちようらく</sup>凋落したヴェネチア共和国の二の舞になりそうです。

これだけ日本は追い詰められている状況ですが、日本人は何も考えません。いや、考えると悪いことしか浮かばないので、考えたくないというほうが正しいでしょうか。今こそ、この現実はどう立ち向かうか考えて動くべきときですが、ペリー来航の13年前に動いた日本人がいなかったように、我々はまた来た道を行くのでしょうか。

## 2023年は暦学でいう「癸卯の年」 最初がすべてを決する年回り

少し視点を変えて、暦学から考えてみます。

暦学と歴史学は、親戚のようなものです。今年  
は十干十二支でいう癸卯かん し きぼうで、「みずのと・う」の年  
にあたります。癸卯の年というのは、万事正しく  
筋を通していくと、繁栄が向こうからやってくる。  
しかし、最初の一歩を誤ると、すべて失うという  
年回りになるそうです。

一つ前の癸卯は1963（昭和38）年で、ケネディ  
大統領が暗殺された年。その前が1903（明治36）  
年で、日露戦争の前年にあたります。日露戦争の  
開戦は早すぎたというのが、今の歴史学の一般論  
になっていますが、日本がもう少し我慢していれば、  
イギリスが先にロシアと戦うことになり、日本は満州を  
手に入れることもなく、アメリカと戦争にはならなかつたでしょう。

当時の日本政府はロシアと協調路線を模索していた  
のですが、一部の有識者が戦争を強く主張したこと  
で、話がそっちのほうに流れてしまいました。「そ  
うだ、戦争をやれやれ」と騒いだのは国民なのです。

さらに60年遡った癸卯は、1843（天保14）年。人  
返し令というのを行い、天保の改革が挫折したの  
がこの年です。こんなふうには、一番やってはいけ  
ないことに手を出して、全部失うというのがこの  
年回りのようです。

逆に、最初の一歩で成功した事例としては、1603  
けいちよう（慶長8）年があります。徳川家康が征夷大將軍に  
なった年。家康は「もう乱世には戻さない、無事  
泰平」というスローガンを掲げて幕府を開き、そ  
の後265年も江戸の世が続きました。

## 多くの人が歴史の見方を勘違いしている 「答え」だけ知っていることの危うさ

改めて、歴史に学ぶとはどういうことかを考えて  
いきましょう。多くの人が勘違いしているのが歴史  
の見方です。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の戦

国三英傑の性格を詠った「ホトトギスの句」があり  
ますが、「鳴かぬなら殺してしまえ ホトトギス」  
は信長で、「鳴かぬなら鳴くまで待とう ホトトギ  
ス」は家康だと思いついでいる人は、誤った歴史  
の見方をしています。

信長は実は慎重な人間で、勝てるまで準備をす  
ることを徹底していました。三人の中で「殺して  
しまえ」が一番近かったのは家康です。家康の松  
平家というのは、カッとしたりやすい家系で、家康  
の祖父も父も長男も、家臣を怒鳴ったり罵倒した  
りしたことが原因で恨みを買って、殺されたり切腹  
させられたりしています。家康も同じ運命をたど  
る人だったのです。しかし、彼は人質生活を12年  
送ったことで、自制することを覚えました。ただ  
し、彼の爪を噛む癖は生涯消えませんでした。み三  
かたがはら方ヶ原で武田信玄に敗れたときや、関ヶ原の本戦  
を戦ったとき、追い詰められて頭が真っ白になり、  
爪を噛んだというエピソードが残っています。

家康の遺訓として有名な言葉「人の一生は重荷  
を負って遠き道をゆくが如し……」も、明治になっ  
てから家康のイメージに合わせて、つくられたも  
のだということが研究から分かっています。

歴史を学ぼうにも、間違った史実を追いかけて  
いては真実にたどり着けません。答えだけ知って  
いても、歴史を活用することはできないどころか、  
かえって失敗してしまうという意味が分かっていた  
だけたでしょうか。

歴史の結果だけ見ると、学ぶべき人物を見失う  
ことにもなります。たとえば徳川幕府二代將軍の  
ひでただ秀忠は、関ヶ原の戦いに遅れた、できの悪い二代  
目と一般的に思われていますが、それは歴史小説  
やドラマで作られたイメージであって、実像は非  
常に優れた二代目でした。

江戸幕府のように、一つの組織が300年続くため  
には、創業者が偉いだけではだめで、二代目がか  
れだけ優秀にかかっています。

会社経営でもそうですが、二代目は先代と競っ  
て勝とうとします。先代ができなかったことをあ

えてやって見せて、「どうだ自分のほうが凄いだろう」と誇示したいのですが、かえって部下を失いがちです。秀忠はこれを一切やりませんでした。

駿河にいる家康の言うことを全て先行させて、江戸にいる自分の家臣たちを抑えきったことから、そのことが分かります。

よく、関ヶ原の戦いの際に秀忠は、<sup>なかせんどう</sup>中山道の真ん中でつつ立っていたといわれますが、真実は違います。家康率いる東軍の形勢が悪くなり、逃げる必要がでてきたとき、中山道を通して江戸に逃げるしかありません。そうなれば追ってくる敵軍と一戦交え、家康を守らねばならない、そう考えて「待ち構えていた」のです。小説やドラマは物語を面白くするために史実を脚色したり、創作したりするので、すべてが史実だと思い込まずに、ほどほどに楽しむのが良いでしょう。

## リーダーに求められる資質「大局観」のなかった家康は、なぜリーダーになれたのか

私は歴史家として、多くのリーダーを見てきましたが、トップに立つ人間に一番必要な資質は「大局観」だと思ってきました。先を見通す力、先見性という意味では、戦国三英傑の中でやはり信長が一番。もし信長が本能寺の変で殺されていなければ、彼は一気に明治維新の手前まで、時代を動かした可能性があります。秀吉は信長の真似なので、大局観10%。家康は大局観ゼロです。

いつの時代も、どの国にも信長・秀吉型のリーダーは存在しますが、家康型のリーダーはいません。そんな彼がどうして天下を取れたのか。私は「寛容さ」にあると思っています。

家康は家臣でも自分より年上なら、殿という敬称を使っていました。また、家康は後継者だった長男<sup>のぶやす</sup>の信康を信長の命令によって殺されています。この一件には家康の重臣・酒井忠次<sup>ただつぐ むほん</sup>の謀叛がありました。

ところが、家康は信康を殺した張本人ともいえる忠次を、肅清するどころか家臣の最高ランクに置きました。家康のこの絶望時における寛容さが、

彼を唯一無二のリーダーにしたのです。

大局観がなかった家康にとって、時代を生き残るためには、大局観をもつ人間を寛容に養っていくしかなかったのです。大局観と寛容は50:50が好バランスですが、大局観がゼロなら寛容は100ないといけません。本来カッとなりやすい性分の家康が、裏切者にも寛容に接した理由は、まさにここにあったのです。

## 歴史を活用すれば、未来を読むことは難しい 歴史から学ぶための三つのポイント

歴史を正しく理解し活用すれば、未来を読むことはそんなに難しいことはありません。大いに活用してもらうためにも、最後にまとめとして歴史と向き合うときに大事な三つのポイントを述べます。

一つめは、疑問を持って立ち止まれるかどうか。日々の生活において、昨日と違う今日というものに気付けるか。そして、立ち止まって「なぜ？」「何が違う？」と考えられるかどうかで未来が変わってきます。

二つめは、歴史を飛躍させてはいけないということ。ドラマでは、あかんたれが一流の人物になったりしますが、人間は飛躍しません。一見、飛躍しているように見えても、必ず中身がある。そこに、目を向けることです。

三つめは、数字を重視したものの考え方を徹底すること。数字が嘘を言った歴史というのは、歴史学にはありません。人間が数字に嘘を言わせた歴史ならたくさんあります。こうあってほしい、こうあるべきだ、こうでなければならない、と期待値が乗って、史実とは違うことが描かれがちです。正しい史実を知るためには、客観的な数字による判断・分析が大事です。

この三点を常に考えながら歴史の現象を見ていけば、未来は確実に見えてきます。どういう未来が見えたかについて、歴史に対する正しいものの考え方ができる人たちがディスカッションをすることで、より鮮度が上がっていくことでしょう。